

昭和52年度作況一覽

えん麦	大豆	小豆	ばれいしょ	てんさい
やや不良	良	良	やや不良	不良

I. 気象概況

農耕期間(4月～10月)の積算平均気温3026.2℃に対し、本年3131.0℃で平年より104.8℃(対平年比3%)高く高温の年であった。すなわち4月下旬、5月上旬、6月中旬および8月上・中旬は低温に経過したが、その他の旬はいずれも平年並あるいは高温に経過した。とくに8月下旬から10月下旬まで高温であった。

積算降水量は平年687.0mmに対し本年603.0mmで平年より84.6mm少なく寡雨の年であった。すなわち8月中旬までおよび9月中旬には平年よりやや多かったがその他の旬は全般に少なく、とくに5月下旬から7月中旬にかけては平年197.5mmに対して本年54.5mmの降雨で寡雨に経過した。

積算日照時間は平年1305.3時間に対し本年1238.4時間で平年より66.9時間少なかった。4月下旬から5月中旬まで、および7月上旬、8月上旬、9月上・中旬はとくに寡照であった。

積算畑地温は平年3033.1℃に対し本年3157.6℃で平年より124.5℃高温であった。

以上より本年の気象は概して高温寡照であったといえよう。根雪終りは平年より7日早く3月29日で積雪期間は108日で平年より18日少なかった。初霜は平年より6日早く10月12日で、晩霜も5月9日と平年より4日遅かったので無霜期間は平年より10日少なかった。降雪始は平年より11日遅く11月11日であった。

II. 昭和52年度の作況

1. えん麦 昭和52年度の作況: やや不良

事由: 耕鋤始後の天候不順により播種は平年より7日遅れ、発芽期も10日おそかった。発芽後7月下旬まで概して降水量が少なく、早ばつ気味に経過したため生育は初期から抑制され、草丈は平年より約20~30cm低い推移した。8月に入って上旬に147.5mmの多雨があり、早ばつ解消されたが、すでに登熟後期であり草丈は回復せず、かえって多湿となったため茎葉の枯れ上りが悪かった。穂の黄熟を成熟期として収穫したがこの成熟期は平年より9日遅れた。総重及び稈重は草丈が低く、平年より著しく軽く、穂数は少な目であったが、登熟の延長により千粒重は重くなった。10a当り子実重は342kg、平年対比97%であった。なお成熟が正常でなかったためか芒がやや長く、1リットル重は軽くなった
以上により、昭和52年度の作況はやや不良である。

品種名 項目/年次		オホーツク		
		本年	平年	比較
播種期(月.日)		5.10	5.3	7
出芽期(月.日)		5.27	5.17	10
出穂期(月.日)		7.15	7.13	2
成熟期(月.日)		8.22	8.13	9
草丈 (cm)	6月20日	30.9	56.8	△25.9
	7月20日	97.1	126.6	△29.5
	8月20日	103.4	125.5	△22.1
茎数 (本/50cm畦)	6月20日	51.5	52.9	△1.4
	7月20日	37.0	42.1	△5.1
	8月20日	34.0	36.4	△2.4
総重(kg/a)		819	937	△126
稈重(kg/a)		387	489	△102
子実重(kg/a)		342	351	△9
リットル重(g)		427	489	△62
千粒重(g)		35.8	33.2	2.6
子実重平年対比(%)		97	100	△3

注) 平年値は前5か年平均。ただし、6、7月の草丈及び茎数は前3か年平均。

2. 大豆 昭和52年度の作況:良

事由:5月中旬の不順な天候のため播種は平年より7~8日遅れたが、播種後気温はやや高めに経過したため発芽期は平年より3日遅れいとどまった。

発芽後7月下旬までは、気温は高めであったが降水量が平年よりかなり少なく、莖長は短めに経過し、分枝数も平年より若干劣ったが開花期は平年より3~4日早かった。

開花後も8月上旬と9月中旬以外は降水量が平年よりかなり少なかったが、気温はやや高く、生育量の回復は不十分であったが登熟はほぼ順調で、成熟期は平年並みであった。また成熟期における主莖長、分枝数、着莢数などはいずれも平年より若干劣ったが、順調な登熟により百粒重が平年よりまさり、収量は「北見白」が315kgで平年対比102%「ユウヅル」は342kgで平年対比120%と晩生品種の作況が良好であった。さらに倒状、病害、虫害等の障害も平年より少なかつ以上により、昭和52年度の作況は良である。

品種名 項目/年次		北見白			ユウヅル		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期(月.日)		5.24	5.17	7	5.24	5.16	8
出芽期(月.日)		6.10	6.7	3	6.10	6.7	3
開花期(月.日)		7.22	7.25	△3	7.27	7.31	△4
成熟期(月.日)		10.6	10.6	0	10.15	10.15	0
主莖長 (cm)	6月20日	6.0	7.3	△1.3	4.6	7.3	△2.7
	7月20日	24.4	29.0	△4.6	23.4	26.1	△2.7
	8月20日	42.7	56.1	△13.4	57.0	61.2	△4.2
	9月20日	42.1	55.5	△13.4	58.4	61.8	△3.4
	成熟期	41.9	54.8	△12.9	54.1	62.5	△8.4
分枝数 (本/株)	7月20日	3.2	3.4	△0.2	2.6	1.8	0.8
	8月20日	5.0	6.8	△1.8	3.9	5.1	△1.2
	9月20日	4.5	6.5	△2.0	4.2	4.8	△0.6
	成熟期	4.8	6.2	△1.4	3.6	4.7	△1.1
主莖葉数 (葉)	7月20日	5.9	6.9	△1.0	6.6	6.7	△0.1
	8月20日	11.5	11.8	△0.3	12.8	13.4	△0.6
	9月20日	13.0	15.1	△2.1	14.8	14.9	△0.1
	成熟期	12.1	15.1	△3.0	13.4	14.9	△1.5
着莢数 (莢/株)	9月20日	69.3	82.7	△13.4	60.4	59.7	0.7
	成熟期	71.4	76.2	△4.8	50.5	55.7	△5.2
子実重(kg/10a)		315	309	6	342	285	57
百粒重(g)		27.3	26.7	0.7	44.7	41.8	2.9
虫喰率(%)		0.5	1.5	△1.0	0.4	0.9	△0.5
品質(等級)		2	2	—	2	2	—
子実重平年対比(%)		102	100	2	120	100	20

注)ユウヅルの平年値は前6か年平均。

3. 小豆 昭和52年度の作況:良

事由:播種期は5日、発芽期は3日それぞれ平年よりおくれた。その後7月中、下旬の早ばつで生育はほとんど回復し、開花期は平年より1日早く、分枝数はやや少ないが、草丈・主茎葉数・着莢数ともほぼ平年並の生育となった。

8月下旬以降、気温は平年より経過したので登熟は順調に進み、9月13日に平年より2日早く成熟期堵なった。成熟期の草丈は平年より低いに着莢数はほぼ平年並みであった。また、登熟期の好天により百粒重が平年より約15%重く、くず豆歩合も平年の約1/2であったため収量は平年より約60kg多い245kg/10aで以上により、昭和52年度の作況は良である。

品種名 項目/年次		宝小豆		
		本年	平年	比較
播種期(月.日)		5.26	5.21	5
出芽期(月.日)		6.21	6.18	3
開花期(月.日)		7.29	7.30	△1
成熟期(月.日)		9.13	9.15	△2
草丈 (cm)	6月20日	—	1.9	—
	7月20日	10.3	10.0	0.3
	8月20日	29.8	30.7	△0.9
	成熟期	27.8	34.7	△6.9
主茎葉数 (枚)	7月20日	4.2	4.6	△0.4
	8月20日	10.1	10.2	△0.1
分枝数 (本/株)	7月20日	0.2	0.7	△0.5
	8月20日	2.1	2.4	△0.3
	成熟期	2.0	2.5	△0.5
着莢数 (莢/株)	8月20日	27.2	28.0	△0.8
	成熟期	36.6	35.6	1.0
子実重(kg/10a)		245	184	61
百粒重(g)		11.4	9.9	15
屑粒率(%)		2.6	5.5	△2.9
子実重平年対比(%)		133	100	33

4. ばれいしょ 昭和52年度の作況:良

事由:5月10日に播種したが、中旬の多雨により過湿となり種いもが腐敗した。このため5月31日に再播し、平年より25日遅い播種期となった。したがって生育は全般に遅れ、開花始も平年より10～13日遅かった。草丈は7月下旬に至って早生の「男爵薯」はほぼ回復し、中晩生の「農林1号」は劣ったが、8月上旬の多雨以降、両品種とも著しく伸長した。とくに「農林1号」は8月末まで茎の伸長と開花がみられ、播種の遅れによる影響が顕著であった。枯凋期は「男爵薯」は疫病により早まり、ほぼ平年並となったが、「農林1号」は遅延し平年より15日遅れた。播種の遅れと疫病被害により、上いも重は「農林1号」は10a当り3,245kg、平年対比86%と低収、澱粉価は両品種共低かった。以上により、昭和52年度の作況は良である。

品種名 項目/年次		農林1号			男爵薯		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期(月.日)		5.31	5.6	25	5.31	5.5	26
萌芽期(月.日)		6.21	6.7	14	6.21	6.5	16
開花期(月.日)		7.17	7.7	10	7.18	7.5	13
枯凋期(月.日)		10.3	9.18	15	9.3	9.2	1
茎長 (cm)	6月20日	—	16.7	—	—	17.6	—
	7月20日	38.8	62.5	△23.7	44.3	46.8	△2.5
	8月20日	80.8	74.7	6.1	64.1	45.9	18.2
茎数 (本/株)	6月20日	—	4.7	—	—	3.9	—
	7月20日	4.2	4.8	△0.6	4.3	4.0	0.3
	8月20日	4.2	4.8	△0.6	3.7	3.6	0.1
上いも重(kg/10a)		3,245	3,786	△541	3,266	3,247	19
でん粉価(%)		11.2	13.3	△2.1	9.6	13.4	△3.8
上いも重平年対比(%)		86	100	△14	99	100	△1

5. てんさい 昭和52年度の作況:不良

事由:耕鋤始後の天候不順により、移植期は5月9日と平年より3日遅れた。移植期の土壌が過湿であったことと、5月中旬の79mmの降雨により、圃場に滞水ができ、土壌の膨軟性が甚だ悪くなったため活着は不良であった。さらにその後の5月下旬から6月下旬の寡雨により、作土全体が硬くしまり、土壌の通気性が悪くなったため、根の伸長が抑制され、地上部の生育も不良かつ不揃いであった。7月以降は8月上旬と9月中旬を除いて、全般に寡雨で、てん菜の生育にとって比較的順調な気象経過であった。しかし、8月上旬の降雨で土壌の膨軟性は若干回復し、通気性も多少良くなったが、孔隙率が依然として低かったので、てん菜の生育は大幅に遅れ、草丈が9月後半に平年並になったのみで、葉数、根周とも平年に比べ不良のまま収穫期に達した。

以上、本年のてん菜は春先の多雨、およびその後の早ばつで、土壌が固結して、孔隙率が極めて低くなったことで、草丈の伸長、葉数の増加と根部の肥大が抑制されたが、この初期生育の遅延と土壌の固結状態が収穫期まで続いたことが重なって、作況は近年になく不良であった。

以上により、昭和52年度の作況は不良である。

品種名(栽培法) 項目/年次		モノホープ(移植)		
		本年	平年	比較
播種期(月.日)		4.1	4.1	0
移植期(月.日)		5.9	5.6	3
収穫期(月.日)		10.24	10.17	7
草丈 (cm)	6月20日	8.5	26.0	△17.5
	7月20日	31.3	43.3	△12.0
	8月20日	57.3	55.2	2.1
	9月20日	59.3	59.9	△0.6
	収穫期	58.6	57.7	0.9
葉数 (枚)	6月20日	8.8	9.6	△0.8
	7月20日	13.0	17.8	△4.8
	8月20日	21.8	25.8	△4.0
	9月20日	24.7	28.7	△4.0
	収穫期	26.1	27.9	△1.8
根周 (cm)	7月20日	9.9	19.2	△9.3
	8月20日	24.2	27.8	△3.6
	9月20日	30.6	32.3	△1.7
	収穫期	31.9	33.7	△1.8
茎葉重(t/10a)		5.75	4.83	0.92
根重(t/10a)		4.17	5.89	△1.72
根中糖分(%)		17.15	16.05	1.1
糖量(t/10a)		715	945	△230
根重平年対比(%)		71	100	△29
根中糖分平年対比(%)		107	100	7

注) 平年値は前4か年平均。